

三人暮らし

総合科学部 人間社会学科 原田素美礼

私がこの「三人暮らし」という本を手にとったのは、表紙の題名に魅かれたからである。なぜなら、一人暮らしや、二人暮らしというのは聞いたことがあるし、珍しくない。しかし、「三人暮らし」というのは一体どんなお話なのだろうかと興味をそそられたのだ。その本の内容は、私の期待を裏切らない優しく温かいものであった。

電球がパチッときれた。アサヨが新しい電球をダイニングキッチンから持ってくる。ソノエが椅子の上ののって電球を取り換える。そして、ツル子が文句を言いながら椅子を支える…。電球を取り換えるのにも、三人でやっどできる。三人で一人分だ！と笑いながら、生活する姿を映したお話である。話の主人公は、人生を引退したおばあちゃん達。眠りが浅くトイレの度に目が覚めるといっては嘆き、化粧をするべきか否かを三人で討論する姿などがとても愛らしい。少ない年金や、離婚した夫からの慰謝料、息子からの援助を上手に使っての生活は、質素ながら幸せに溢れている。

元気なおばあちゃんの三人暮らし、幸せな日常。私はこの作品を読みながら、幸せな気持ちになった。そして、少しだけモヤモヤした。それは、島根県にいる大切な祖母のことを思い出したからである。

祖母は島根県の田舎に住んでいる。そこでは、去年殺人事件があった。全国の新聞やニュースでとりあげられた女子大生がバラバラにされた事件だ。私はこの町で生まれ育ち、家族みんなで支えあって育ってきた。両親が共働きであったこともあり、よく祖母と一緒に生活をした。町内全体が知り合いのような暖かい環境があり、両親と過ごす時間が少なくても人の優しさや温もりを十分に感じることでできる町であった。道ですれ違う人の多くは顔みしりや、道路には挨拶と些細な談笑を楽しむ淑女達で賑やかであった。私の祖母も外に出るのが好きな人であるから、よく近所のおばあちゃん達と押し合うように温泉センターや、合唱に通っていた。私はそんな明るい故郷と、楽しいおばあちゃんが大好きであった。

事件があったのは、去年の冬である。私は毎日流れる報道で心配になり、友達や祖母に電話をした。みんなが顔見知りのような小さな町で起きたことであるから、大変な事件になっているだろうと考えたからである。しかし、電話口での祖母は落ち着いていた。以前と変わらない張りのある声であった。それから何カ月か経ち、久しぶりに帰った地元の町は、以前と変わらない町並みであった。しかし、いつもとは少し違う雰囲気にも包まれていた。賑やかだった道路は閑散とし、道を歩いている人はまだらで寂しげな雰囲気にも包まれていた。足早に横を通り過ぎた小学生らしき子どもたちは防犯ブザーをカバンにつけ、目も合わさずに駆けていく。

「道を歩いている人が少なくなったね」と、私が祖母に話しかけると、

「年寄りばかりの町だからね。みんな病院か家で寝てるんだよ。」と祖母がサクッと笑った。

いつもと違う町の景色のなかで、昔のままの明るい祖母が、隣にいてくれた。近所のおば

あちゃん達と集まって噂話をしたり、美容院に行ったりと以前と少しも変わらない。私が徳島に帰る時には、大きな紙袋を持たせてくれた。島根の祖母の家から徳島の自分のアパートの部屋に帰って、なんだろうと思いながら早速紙袋を開けてみた。紙袋からは懐かしい香りが漏れて、一枚の手紙と、大好物のかき揚げやポテトサラダが入っていた。容器からはみ出る程詰められた惣菜は、輪ゴムでおさえされ、紙袋にパンパンに入っていた。

私は一人暮らしのアパートで少し泣いてしまった。昔も今も、私の帰るのを楽しみに待っていて、好物を覚えていてくれて作ってくれる。そんな変わらない祖母の愛情を、精一杯詰め込まれた容器から感じたからである。

この“三人暮らし”という本のおばあちゃん達をみると、島根の祖母が重なる。カサカサと動き、スーパーの豚の味噌漬けを掴んで離さない姿、時には髪をとかし、口紅をぬる姿など、似ている点が多く、おもわず微笑んでしまう。私がこの本から貰ったものは、元気と愛情である。この本のおばあちゃん達のように、私のおばあちゃんもいつまでも、変わらず、笑顔で長生きしてほしいと切に願う。この本は、“今日あたり、電話でもしてみようかな”そんな気持ちが湧き上がる、身近な人を愛おしく思える、とても素晴らしい本であると思う。